

なしの古典はもう聽かれない!!

もつとも、京の花見小路で、生意氣にも、地唄が聞きたいと云つたら、出來る藝者はおばあさんにもなかつた!! こんな時勢である。

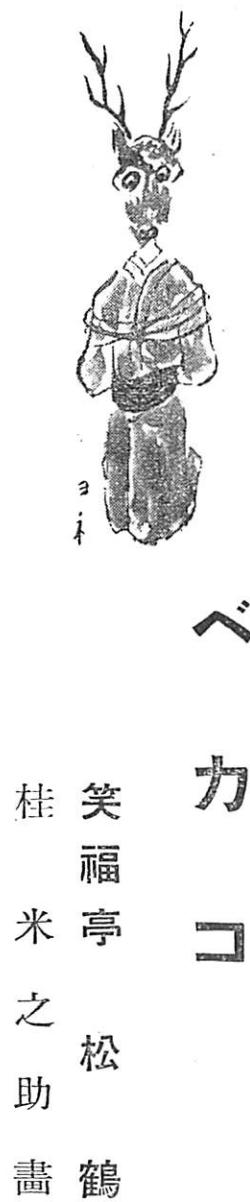
東京でも、反対車の人力を圓タクにしたり、うどん屋を支那ソバ屋に替へたり、角力を野球と入れ替へて、新人ぶつて馬鹿ばかりが多いのだから仕方がないが、はるばる上方で來て、わざ／＼骨折つて求めて、上方ばなしの古典に出會はないのは悲しい。

幸ひ、復興期もあるし、貴重なる御誌の力もある事だし、年に二三度、炎天に冷水を求むる心で上方にやつて来る、はなし好きの筆者が、座ぶとんの上で相格くづす日の、一日も早く來らん事を祈り、併せて、はなし家諸氏が、ちつくり勉強せられて、古典に歸つて下さる事を望む次第である。

小咄 タ立賣

タ立や／＼と賣て通る、これは珍らしい商人ぢやと言て居ると向ふの娘が、もし／＼タ立を三文下さい。これはあんまり少ない何になされます。稗蒔へかけてやります。

(安樂庵策傳作 つくつくし)



エー一席は一人旅のお噂を申し上げます。名前は泥丹坊堅丸と申します田舎廻りの漸家で、所々方々を巡業致しまして、肥前の武雄の湯治場に大黒屋市兵衛と申します旅人宿がござります。此宿へ泊り込みまして、湯治客のお座敷をして頂いて居りましたが、或日の事、大黒屋の表口へお越しになりましたお武家様、

「ア、コレ、市兵衛は宅に在るか」

「へイ、何誰様かと思ひましたら、これは菅沼の旦那様でござりますか、誠にお久敷うござります」

「ア、何日も繁昌ぢやのウ」

「へエ、おかげ様で有難うござります」